

二〇〇三年

一月

懐旧のとき

同い年なれば親しき従妹の病みみし背の君昨夜逝きしと
東大卒大蔵省より新日鉄に移りし叔母の自慢の婿逝く
早稲田卒なんてと反対された夫と我健やかに田舎に生きゐる
思ふさま生きて来たれる我なればかくある今を深く謝すべし
冬三更熱き紅茶を入れにけり一人静かな懐旧のとき

二月

米寿の夫の師

夫の師の米寿を祝ふの市比野に我も呼ばれぬ友ら優しき
三十余人遠方よりも集ひ祝ふ米寿の師の顔ただゆるみゐる
五十年昔は憧れの的たりしと老師の写真示すかつての女学生
師志望のドイツ近代史の道を閉ざししは学徒出陣の戦争

「双頭の鷲」とて師の吹けるハーモニカ楽も面影もただ偲ぶのみ

三月

IRAQ開戦

ばやけたるモスグリーンの画面奥に続々とはじけり白き閃光
起こるならむ起こらざらましと祈りたりし戦争の火蓋ついに落ちた
り

何ゆえに殺し合つかや命令に直に従ふ兵卒の哀れ

ラムズヘルドの会見に浮かぶ一将の功なり万骨枯るといふ言

幾百万無辜の民の殺されし日本の今は無言なる悲しき

四月

一局の暮

五年ぶりにパソコンの囲碁開きけり以前と同じく四子を置きて
五年間の囲碁のブランクきびしかり大敗続く春の夜深きに
布石良しいざと近寄りて戦へばパソコン賢し分断され行く
人生も一局の暮なるか父の遺志を生かせしを以て勝ちと為したし
打ちかけのあちこちのある我が生よ残れる時を惜しみ打たばや

五月

福岡は近し

友の夫の博多に転勤再会を楽しみにすとの嬉し報あり
職場にて結ばれし君らの転勤の福岡を近しと思ふ今朝かな
我が子ほどの若き上司の突然に逝きしを我に伝へしも君ら
亡き人を語り明かさむ今君の福岡転勤の報を手にはせば
定年も間近な我を若きらの温く包めぬし良き時代のあり

六月

雨激し

雨無くて田植え出来ずとの嘆きいづこ大雨洪水警報の日々
排便せむと外を窺う猫どももたじろぐ大粒の雨の激しさ
鹿児島は東京よりも雨粒が大きいと次男の嫁は言ふなり
初咲きの大き八重なるクチナシの香りも空しく雨に消えゆく
沛然と降る雨音を独り聞けば酔へる夫待ちし夜々思ひ出づ
鹿児島島の梅雨の晴れ間ははや真夏日差しも強し湿度も高し

七月

山城の探索

梅雨未だ明けやらぬ朝中世の山城探索と集ひ登りぬ
倒木をくぐり乗り越え草むせる山城跡へひたよぢ登る
山々を城と割拠し戦乱に明け暮れし日を愚とは思へど
我が年を思はず登りし山城よ下りの足元は踏み止まり得ず
七八本うち捨てられしポンタンの軽ろきその実を一つもぎ来る

八月

若き日の夢

愕然とやがて惘然となりし我はや敬老の祝はるる身とは
電車にて席譲られしと驚きを我に告げぬし母思ひ出づ
戦争のために挫折を強いられし梵字者父の無念さを偲ぶ
生計のためと挿絵を描き続けし虹児の無念もふと思ひ出づ
残されし刻を計りて成さざれし若き日の夢に挑まむ我は

九月

運動会

遠く逸れし台風の余波心地よし風清めたる空は澄みみて
朝六時号砲の一斉に轟きて町内四校秋期運動会
台風の余波にはためく万国旗青空のもと色鮮やかに
息合ふも合はずに抱へ引きずるも楽しき親子の二人三脚
競ふより参加の意義に集ひたる児童数より多き大人たち

十月

自選十首

刈り終へし田の辺に柿の色映えて明日香の里に優し秋の陽
茜さす山影柔しふかぶかと秋色纏ふ万葉の里

屋根を打つ雨音のいつか微かなり独り稿書く師走のあけぼの
霜枯れし紫陽花の葉の朽ちし色に老残の思ひしばし離れず

年の瀬の包み届けりそれぞれに己が道行く五人の子らより
子等五人それぞれに生きそれぞれの悩みあれども幸せと言ふべ

し

なにゆゑにと訝りつつもひたひたと近づきつつあり戦争の足音

冬三更熱き紅茶を入れにけり一人静かな懐旧のとき

沛然と降る雨音を独り聞けば酔へる夫待ちし夜々思ひ出づ

雑踏の中にあてふと鹿兒島の八年は夢と思へる不思議さ

自選十首

身内一人また逝きて立つ空港のバス待つ肩に晩秋の風

二十日市の朝に死したる若き猫の塚に二尺のこぶしの苗植う

都井の海見納めならむと肝を病む老兵静かに遙かを見詰むる

たまゆらの優しき眼差し我に投ぐ十の瞳の六つすでに無き

ひたと夫に寄り添ひ立てる我なれば「からたち日記」を挽歌と歌

ふ

銜ふなくのびやかな預選歌眺めつつ歌のこころのありと思ふ日

手繰り寄せて歳月を戻す術のあれ胸を突き刺す懐旧の念

田原坂雨中の死闘を悼みつつ白き慰霊の塔仰ぐ秋

茜さす山影柔しふかぶかと秋色纏ふ万葉の里

屋根を打つ雨音のいつか微かなり独り稿書く師走のあけぼの
地下鉄に揺られてふと鹿児島は八年は夢と思へる不思議さ

屋根を打つ雨音のいつか微かなり独り稿書く師走のあけぼの
霜枯れし紫陽花の葉の朽ちし色に老残の思ひしばし離れず
ゆるゆると師走の風は浮かびる手水の鉢の枯れ葉を回す
年の瀬の包み届けりそれぞれに己が道行く五人の子らより
購ひしバリカンを手に垣を刈る夫の姿も様になりゐて
なにゆゑにと訝りつつもひたひたと近づきつつあり戦争の足音

十月

朝河貫一博士

二本松戊辰の役の傷もまだ癒えざりし地に巨星生受く
ふつつつと興国の熱気たぎりたる早稲田に学びし若き日の博士
渡米して堂々と世界に我が国の中世を論ぜり KANITIIASAKAWA
薩摩人來誰が博士をこの僻地に古文書ありと知らしめたりしや
我も今人來にありて細き糸の博士とも結ばれぬしを知るなり

十一月

旧友と行く

二十年は昨日の如し友と行くハイデルベルグは入来麓なれど
ナポレオン、ワートルローと大声で田舎道聞く友も若かりし

語り合ふ窓辺は水面秋の日のライン下りの船の食堂

デュッセルのテレビ塔にて巡る街ケーキ食みつつ見下ろしし日もあり

特攻を悼む碑見し午後案内せる南州神社に師と遇ふ幸せ

十二月

十年経ぬ

十年経ぬ同じ心に君泣くやとふと口ずさむ月の窓辺に

母となり孫も九人と年ふれど月仰ぎ見れば心みづみづし

ふと肩の触れなむとして離れたる十五の秋の君すでに亡し

濡れ落ち葉は我とやそつと省みる締め切り迫る文綴りつつ

父逝きて弟妹も姪も病むと聞く十年も経たり故郷はるか

二〇〇四年

三月

追憶

棚奥の古き手箱はその昔写真入れしをふと思ひ出づ

五十年昔の写真は小さかり色褪せたれどただに懐かし

若き日の古き写真の追憶を夫と語らふ早春の夜

貧しくも皆貧しければ楽しかり共同炊事場の笑ひ甦る

いつしかに夕陽の年なり心して生きてし行かむその日その日を

二〇〇四年九月

渋柿

柿八年台風にも耐へし初生りの熟せる食めば渋き渋柿
取り見れば瓜実型のその柿は生家にありし渋柿に似て
弟と屋根に登りて柿もげば疎開学童の列の下行く
口々に「頂戴」といふ飢えし子らに渋柿なるを大声で答ふ
甘柿なれば投げ与へしをと弟と口惜しがりし杳き秋の日

十月

秋日

弔問の受付に一人座りある庭に名残の一輪の薔薇
葬送の儀は斎場と誰一人留守なき家に秋薔薇ひとつ
台風に折られし高野槿の枝に露きらめきて空なほ青し
早々と炬燵を入れてぼんやりとワールドシリーズ眺むる幸せ
救命は一人なりしか実況を祈りを込めて見続けたりしが

十一月

運命

十人目の孫誕生の知らせあり小春日静かに影落とす夕べ
男のこ五人娘五人の孫持てば何をか望まむ七十路に入りて
夫立てる筮竹の卦も推命も我が晩年は心豊かてふ
挫折感無きにしも非ずその都度に我が運命を信じて生きゐる
比叡山息の儀式よ亡き父母の喜び思ひ形見の帯締む

二〇〇五年

一月

青葉の笛

新市なりて記念の能の演目に薩摩守をと師に願いたり
誰も知る詠み人知らずの悲しみを桜の夢幻の舞に偲ばや
インターネット「青葉の笛」を開きたればギターの調べのタタと流れ出づ
敦盛と忠度偲ぶ哀調の調べ懐かししばし聞き入る
母偲ぶ曲と岡野弘彦の語れるはこれ「青葉の笛」

二月

富岡城

窓外の天草灘の紺碧の波静かなり春浅き朝
娘の家族や友と来たるも行かざりし富岡城をひたすら目指す
ゆるぎなき権威の証か天草の丘より見下ろす白壁の城
復元の工事中なれど富岡城登れば眼前は雲仙島原
島民の怨嗟の的の富岡城今や観光の資源と装
屋根を打つ雨音のいつか微かなり独り稿書く師走のあけぼの
地下鉄に揺られてふと鹿児島島の八年は夢と思へる不思議さ

四月

狼少年

サイレンの音響かせて救急車うつろな我を乗せひた走る
あまりにも未完のこの多ければ遠のく意識に懸命に絶る
点滴も終わり医師より過労なりゆるゆる休めと諭され戻る

卓上の電話を取れば「入院したとじゃなかと」と驚かれぬる我
ご近所をすっかり驚かせし我は今や狼少年の心地す

六月

圭子

あずさ号上諏訪往復をジパングで購ふは梅雨の午後の川内駅
姪圭子半月後にある慰霊祭それまでもためと妹知らする
その母は四十八歳で逝きしなり圭子四十五歳同じき病に
おばちゃんに会ひたいと言ふと聞きたれば何はさておき駅にと走
る

高校を八王子の我家より通ひたる白き丸顔は変貌激しとふ

七月

友ありて

慰霊祭息と行く我を待つ友あり一山越えて来るなり
一年は瞬く間かな霧ヶ峰老鷲の囀り聞きつつ再会祝ふ
夫逝きて娘二人を育て上げ孫もありとふ友逞しき
遠慮なき会話に何も残滓なきは昔の友の有り難さかな
荷になると言へども自慢の奈良漬けを我のリュックにしのはせ
る友

八月

イラク悲惨

今日もまた自爆爆発誘拐と荒れたイラクの報の流るる
報復のテロは却ってテロを憎む敵生むばかりを思はざりきや

インターネット覗く耳に入るおぞましきニュース何時果てむこの現世に
慈しみ育てし子らを戦場に送るやむなき強国の父母よ

まさに人を狂気に誘ふ戦争をオリンピックピックに代替させばやな

クルスン峡

川内川源流求めて逆上る行き行きし果てはクルスン峡とふ

山小道ガタコト揺られて小半時車はそこまでとクルスンの谷

源は熊本の白髪岳といふ川内川は奥まだはるか

初台風の雲足早しクルスンの流れも速し深緑の谷

川内川えびのの平をゆるやかに蛇行し行くを見下ろしし日もあり

比叡の里

三男の住職認証の式ありて比叡の里に夫と降りたつ

冬まだき琵琶湖の風の柔らかく朝の街並み人気僅かに

滋賀院の本院に座し厳かな読経の中に夢かと座しゐる

天台のお座主の丸き背を拝し亡父への友誼をただ深く謝す

光秀の墓尋ね行く西教寺厳と鎮まれり初冬の夕べに

市比野の湯

西の陽の曇りガラスにほんのりと丹色の影投ぐ春の浴室

湯気満てる広き浴槽の眼前を若き裸身の俯き過ぐる

透明の出湯につかりゆったりと手足延ばせば我が肌も白し

薬湯や電磁波の湯や身をほぐすバブルの湯あり市比野の出湯

足裏を湯の奔流に打たせつつ母姑がゐませばと思ふ

轟の瀨

頭上なる鯖雲の果て赤々と入り日は丘の樟の木影に
急流の波の削れる岩幾つゾウガメの如く丸まり群れ居る
命かけし恋のごとくと詠まれたる舟のまぼろし晶子と重ねる
対岸の木々はねぐらか白鷺の十数羽ゆるく舞ひ降り止まる
暮れなすむ川内川の轟の瀨人影もなく波音ばかり

穎娃の旅

暮れなすむ残照に映えて開聞の海辺に立てる姿優しき
遣唐使漂着せしとふ碑のあれど訪ふ人なきか戸柱の浜
秋の陽のまだ酷しきに海青き番所の浜に人影もなし
忠敬の絶景と嘆じしもむべなりき夫と番所に開聞を見る
大野岳頂に立てば南薩の眺望はるか眼下に池田湖

免許証

新しき免許証手に眺むれば一際老いたるわが顔写りみて
バンパーを凹ませ悄気ある我に夫の厄払いぞと言へる優しさ
ジープならば頑丈ならむとインターネットの車探しのページ探る夜
入来峠越えて市内の忘年会行けるも今年が最後ならむや
酔える夫を乗せ霧深き入来峠越ゆるはもはや無理となりしか